

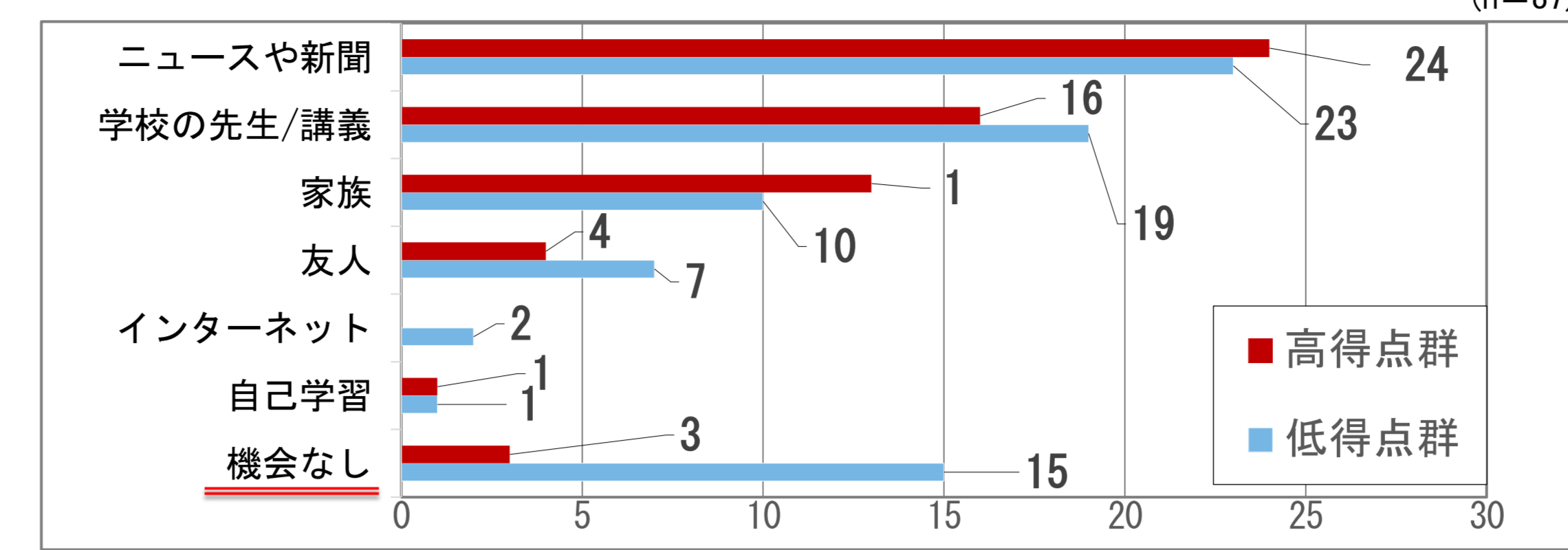
医学系大学生のHPVワクチンについての知識と将来的に啓発する意志の関連

氏名:191001 麻生ゆきの 191035 橋典子
担当教員 巻島愛



結果—HPVワクチンの知識を得た機会—

●HPVワクチンの知識を得た機会(複数回答)
先行研究と同様ニュースや新聞・学校の先生・家族が多い
低得点群は機会がない人が多い



考察

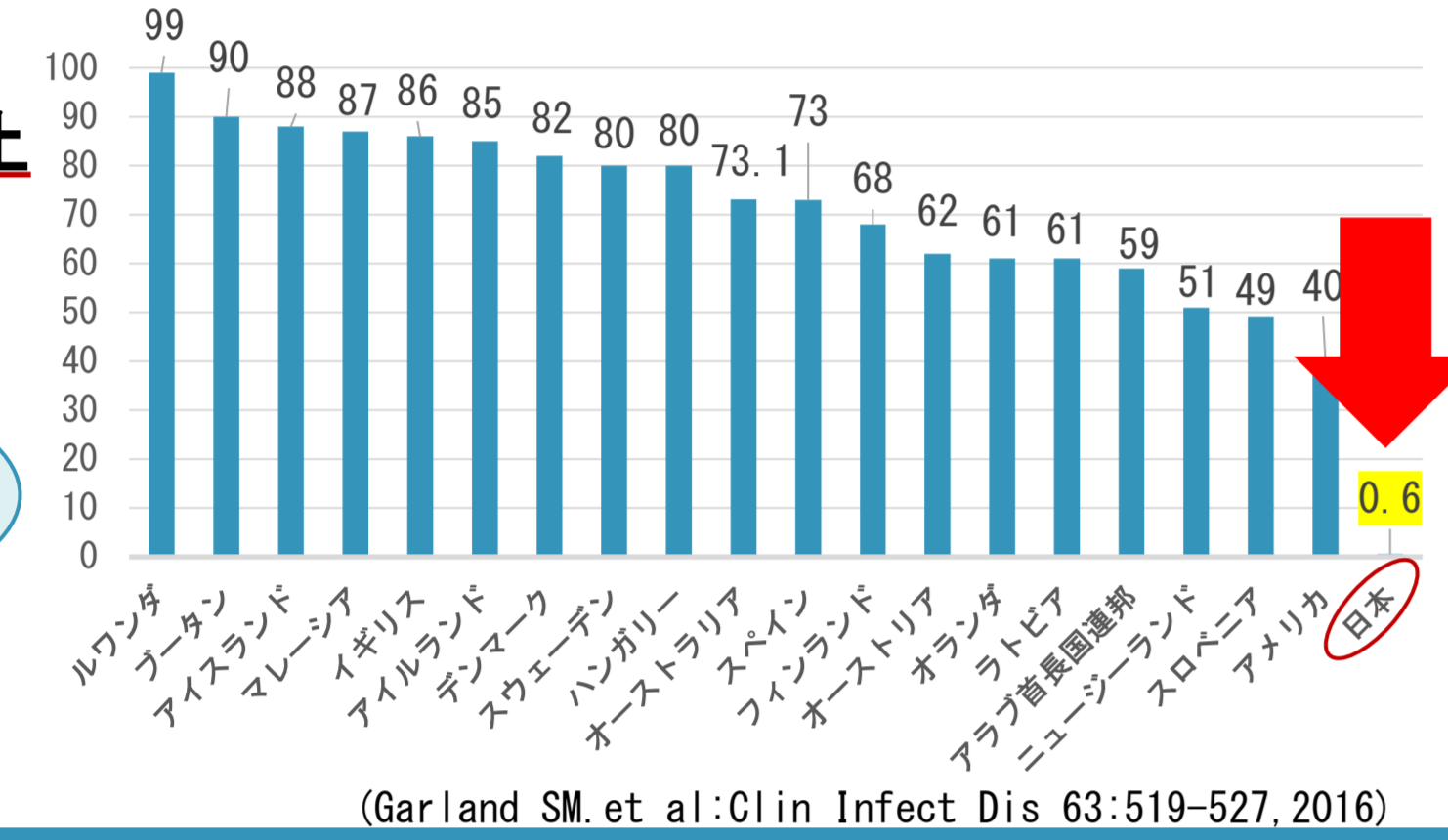
—HPVワクチンに関する知識と将来的に啓発する意志の関連—

- 知識得点と学年
2・3学年と4学年の間に有意差あり → 3学年の後期にある産婦人科学の講義が知識獲得に影響した可能性
- HPVワクチンの知識を得た機会
対象が医学系大学生 → 学校の先生=医師より専門的な知識を得ている可能性
- 保護者は医療者や学校からの知識提供を希望(石野ら2016) → 積極的勧奨年代にかかわる教育機関と連携。外部講師による小中学校へのがん教育などの啓発活動勧める

背景

2013年4月
HPVワクチンが定期接種化
2013年6月
厚生労働省より
HPVワクチン積極的勧奨中止

各国HPVワクチンプログラム接種率



ワクチン接種後の様々な症状や副反応の訴え相次ぐ

方法

- ◎種類
量的記述的研究デザイン
- ◎対象
A大学医学部医学科2~4学年 373名
- ◎調査方法
オンライン調査票(Googleフォーム)の無記名自記式調査票調査
- ◎調査期間
2022年6月3日~27日

結果—HPVワクチン接種の有無と理由—

- HPVワクチン接種の有無
接種あり:10名(11.5%) → 女性35名 接種あり:10名(28.6%)
接種なし:77名(88.5%) → 接種なし:25名(71.4%)
- HPVワクチン接種の有無の理由
接種あり:
「母親に連れていかれた」「学校で勧められた」「予防できる病気は予防したい」「中学校で一緒に行った」
接種なし:
「機会がない・逃した」「副反応が怖かった」「存在を知らなかった」「必要性を感じなかった」

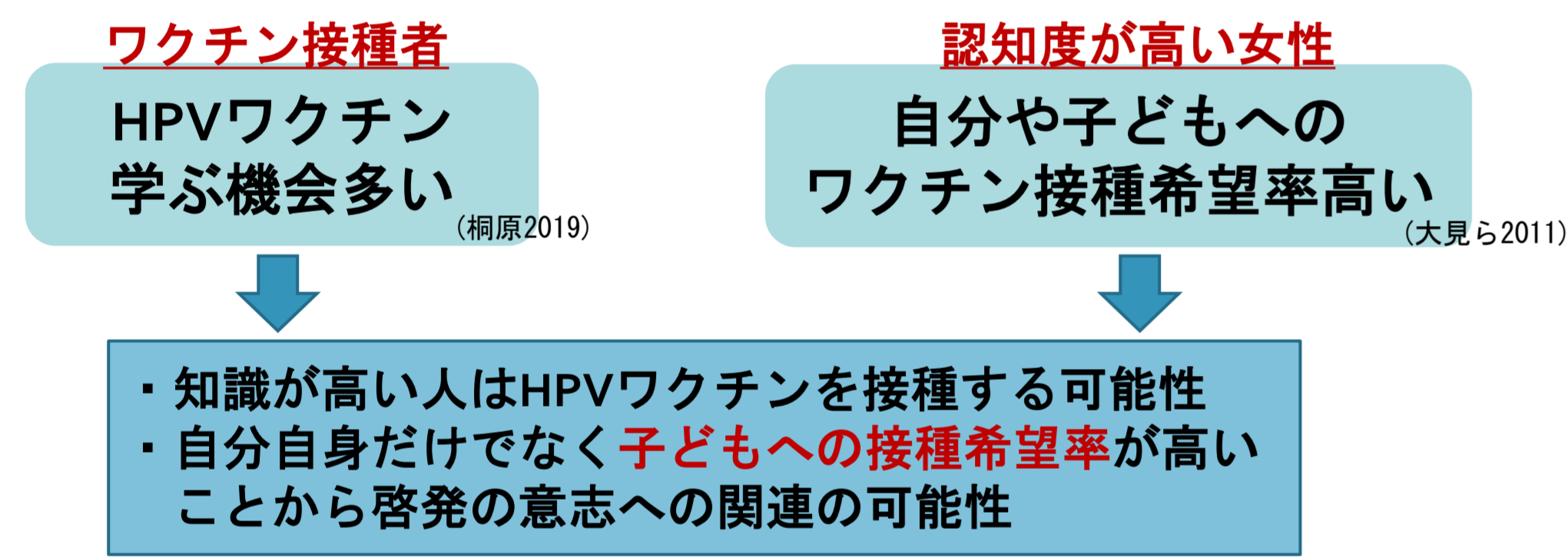
考察

—女性のHPVワクチン接種と将来的に啓発する意志の傾向—

- HPVワクチンを接種した理由
自分の意志で接種した者が少なかった → 「母親に連れていかれた」「学校で勧められた」「予防できる病気は予防したい」「中学校で一緒に行った」「祖母が婦人科系の病気で亡くなった」
- 接種年代は未成年 → 意志決定権をもつ親への働きかけが重要親世代にも有効性を周知していく

背景

積極的勧奨再開の議論を実施
HPVワクチンの有効性・安全性を海外の研究や日本の副反応発生率から明らかに → 2022年4月1日 積極的勧奨の再開



方法

- ◎調査内容
1. 基本属性(性別 年齢 学年 婚姻の有無)
 2. HPVワクチンに関する知識(15項目)
 3. HPVワクチンの知識を得た機会
 4. HPVワクチン接種の有無・理由
 5. キャッチアップ接種希望の有無・理由(女性のみ)
 6. HPVワクチン接種の啓発意志の有無・理由

結果—キャッチアップ接種希望の有無と理由—

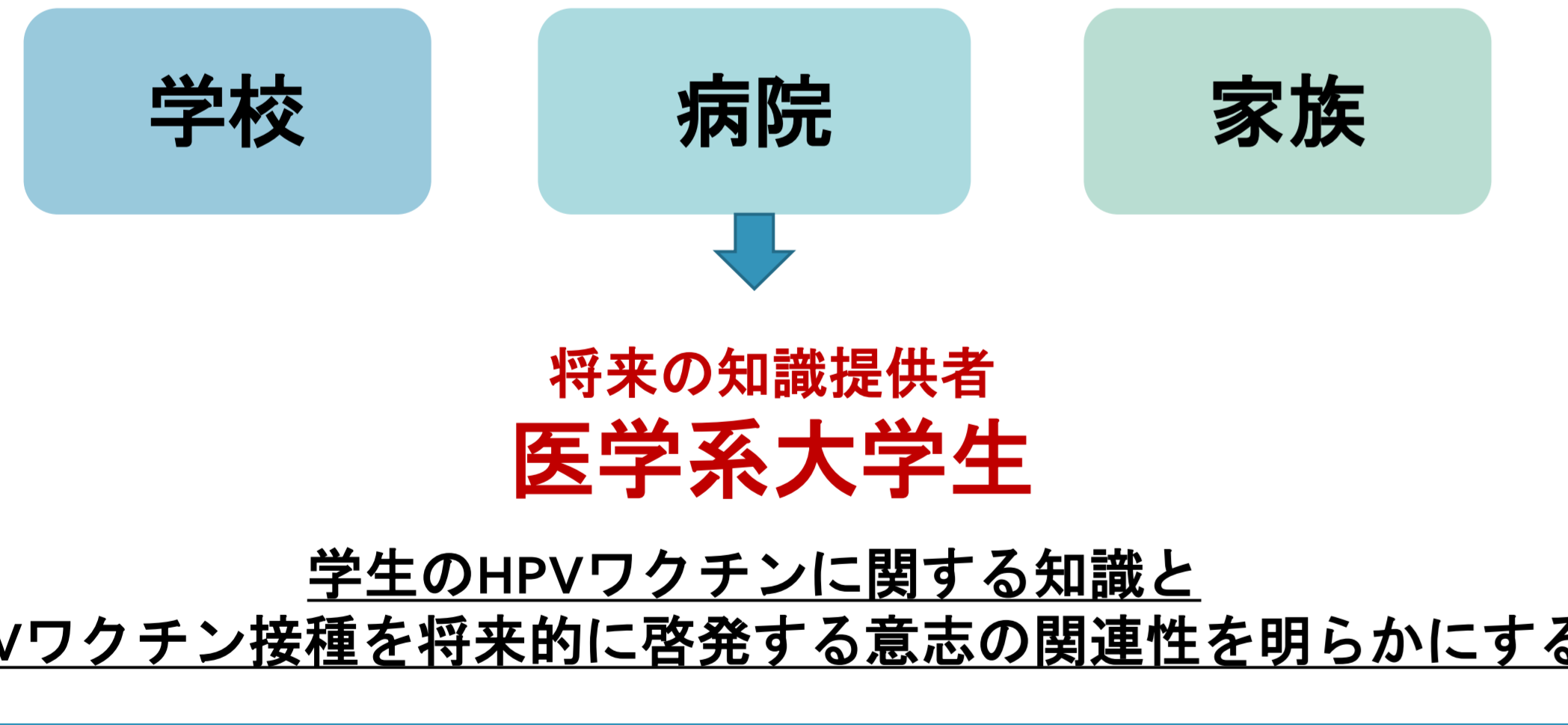
- HPVワクチンのキャッチアップ接種希望の有無(女性のみ)
希望あり:21名(60.0%)
希望なし:11名(31.4%)
未回答:3名(8.6%)
- 希望なしの理由
「必要性を感じない」(5名)
「副反応が怖い」(4名)
「仕組みがわからない」(3名)

考察—男性のHPVワクチンへの意識—

- 男性のHPVワクチンの有用性
男性がかかる病気(中咽頭がん、肛門がん、陰茎がん)にも効果あり
子宮頸がんワクチンという名称 → 男性への有用性認知されにくい
- 男女性差なく有用であることを示す工夫が必要となるのではないかと示唆

背景

知識提供にかかわるもの



結果—基本属性—

- ◎説明・配布数/回答数
説明・配布179名 回収90名(回収率50.3%)
有効回答87名(有効回答率96.7%)
 - 学年と性別
- | 学年 | 全体 | 男 | 女 | その他 |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| 2学年 | 37名 | 24名 | 13名 | 0名 |
| 3学年 | 25名 | 16名 | 8名 | 1名 |
| 4学年 | 25名 | 14名 | 14名 | 0名 |
- 年齢
-
- 婚姻の有無
未婚82名(94.3%) 既婚4名(5.7%) 未回答1名(1.0%)

結果

—HPVワクチン接種を将来的に啓発する意志の有無と理由—

- 将来的に啓発する意志
- | | 全体(n=87) | 女性(n=35) | 男性(n=51) | その他(n=1) |
|---------|------------|------------|------------|----------|
| 意志あり | 62名(71.3%) | 24名(68.6%) | 38名(74.5%) | 0名(0.0%) |
| 意志なし | 7名(8.0%) | 3名(8.5%) | 3名(5.9%) | 1名(100%) |
| どちらでもない | 18名(20.7%) | 8名(22.9%) | 10名(19.6%) | 0名(0.0%) |
- 啓発する意志の有無の理由
意志あり:「メリットが大きい」「防げるものは防ぎたい」
意志なし:「ワクチン反対」「副作用が多い」
どちらでもない:「よくわからない」「本人が判断すること」

結論

1. HPVワクチンに関する知識と将来的に啓発する意志の関連は低かった
 2. 医学系大学生の約7割が将来的に啓発する意志がある
 3. キャッチアップ接種希望者とHPVワクチン接種者に将来的に啓発する意志がない者はいなかったことからHPVワクチン接種者を増やすことで将来的に啓発する意志がある者は増える可能性があることが示唆された
- ◎本研究の限界
新型コロナウイルスの影響により分散登校下であり、十分な配布数の確保が出来なかったため結果にバイアスが生じた可能性あり

結果—HPVワクチンに関する知識—

- HPVワクチンに関する知識(15点満点)
平均点10.1点(最高14点 最低6点)
正答率60%以上
 - 知識得点と学年
- | 合計数 | 検定統計量 | 自由度 | 漸近有意確率 |
|-----|-------|-----|--------|
| 87 | 7.763 | 2 | 0.021 |
-

結果

—HPVワクチン接種を将来的に啓発する意志の有無と理由—

- 得点群と将来的に啓発する意志の有無
-
- キャッチアップ接種を希望する者の中で啓発する意志の有無
意志あり:17名(81.0%)
どちらでもない:4名(19.0%)
意志なし:0名(0.0%)

引用・参考文献

- 1) 桐原あずみ (2019) 「ヒトパピローマウイルスワクチン推奨年代の接種後の継続的な検診の必要性についての知識に関する研究」『桐原/日本保健医療行動科学学会誌』、34(2)、pp118-125.
- 2) 石野晶子、加藤英世 (2016) 「保護者が求める子宮頸がん予防の健康教育に関する研究」『母性衛生』、57(1)、pp115-122.
- 3) 今井美和、吉田和枝、大門真理那、中西愛海、山越香奈 (2021) 「子宮頸がんとその予防に関する医療系女子大学生の知識と態度の状況について」『石川看護雑誌』、18、pp1-12.
- 4) 大見広規、石川弘枝、高橋奈緒子、加藤千恵子、潘本雅津子、舟根妃都美、結城佳子、メドウズ・マーチン、寺山和幸 (2011) 「大学生のヒトパピローマウイルスと子宮頸がん予防ワクチンについての認知度と態度」
- 5) 桐原あずみ (2019) 「ヒトパピローマウイルスワクチン推奨年代の接種後の継続的な検診の必要性についての知識に関する研究」『日本保健医療行動科学学会誌』、34(2)、pp118-125
- 6) 杉本海晴、監物万里香、金子佳世、塚本康子 (2017) 「看護女子大学4年生の子宮頸がん予防に関する実態調査」『新潟医療福祉学会誌』、17(2)、pp56-59.
- 7) 服島景子、小田彩香、山本智恵、額田麻子、平田千紗、伊東美佐江 (2014) 「女子中学生のHPV感染予防ワクチン接種経験とその要因に関する研究」『厚生学』、61(1) pp26-32

